別紙様式３（修士申請者用）

（西暦）２０２１年度　博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること）

幼児の母親がインターネット上の健康情報を活用するための
ヘルスリテラシーの特徴　－e ヘルスリテラシー得点別の比較－

学位の種類：　修士（看護学）
東京都立大学大学院
人間健康科学研究科　博士前期課程 人間健康科学専攻　看護科学域
学修番号：17894604
氏　　名：鈴木　園子
（指導教員名：斉藤　恵美子　教授）

注：1 ページあたり 1,000 字程度（英語の場合 300 ワード程度）で、本様式 1～2 ページ（A4 版）程度とする。

目的：本研究の目的は、幼児の母親がインターネット上の健康情報を活用するためのヘルスリテラシーの特徴を明らかにすることとした。
方法：都内 A 区 B 保健センターで実施された 1 歳 6 か月児歯科健康診査と 3 歳児健康診査の受診対象児の母親 672 名に対して、健康診査終了後に無記名自記式質問紙を配布し、郵送により回収した。調査項目は、基本属性、子どもの健康に関する情報入手・相談先、インターネット利用状況、ソーシャルネットワーク、ヘルスリテラシーなどとした。ソーシャルネットワークは日本語版 Lubben Social Network Scale(LSNS-6)を使用した。ヘルスリテラシーは、eHealth Literacy Scale 日本語版尺度（eHEALS）を使用し、中央値より低群と高群に区分して、χ^2 検定と Fisher の直接確率検定を用いて 2 群間で比較した。また、eHEALS 得点は、基本属性などについて Mann-Whitney U 検定を行った。有意水準は 5%未満とし、分析には統計解析ソフトウエア SPSS ver. 27 を使用した。調査期間は 2020 年 7 月 14 日から 11 月 6 日までとした。なお、本研究は、2020 年度東京都立大学荒川キャンパス研究倫理委員会の承認（承認番号 20014、承認 2020 年 6 月 10 日）を得て実施した。
結果：回収数は 203 名（回収率 30.2%）であり、データの欠損など記入に不備のある 7 名を除外し、196 名（有効回答率 29.2%）を分析対象とした。分析対象者のうち、1 歳 6 か月児歯科健康診査来所者は 112 名（57.1%）、3 歳児健康診査来所者は 84 名（42.9%）であった。対象者の年齢は 30 代が 141 名（71.9%）と最も多かった。子どもの健康に関してインターネットを「利用する」と回答した対象は、190 名（97.0%）であった。そのうち、子どもの健康に関する情報検索の頻度を「週 1 回以下」と回答した対象が 128 名（67.4%）と最も多く、情報検索の時間は 1 日あたり「10～30 分未満」が 62 名（32.6%）であった。子どもの健康情報の検索に利用するツールは「Google」132 名（69.5%）、「Yahoo」97 名（51.1%）、「Instagram」50 名（26.3%）の順に多かった。eHEALS 得点中央値は 26.5 点であり、低群（n=98）、高群（n=98）に区分した。低群は高群よりも、子どもの健康に関する相談先 2 か所以下（p <.05）、インターネット利用時の使用ツール 2 種類以下（p<.05）、「情報が多くてわかりにくい」（p <.05）と回答した割合が有意に高く、「悩みが解決する」（p<.01）と回答した割合が少なかった。
考察：これらの結果から、看護職等が保健サービスの場面を利用して、育児中の母親にインターネット上で信頼できる情報の入手方法や活用方法を伝えることや、情報や相談先が不足している母親に対しては、その特性に応じて個別に支援することの重要性が示唆された。